

一房の葡萄

有島武郎

青空文庫

僕は小さい時に絵を描くことが好きでした。僕の通っていた学校は横浜の山の手という所にありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校の行きかえりにはいつでもホテルや西洋人の会社などがならんでいる海岸の通りを通るのです。通りの海添いに立って見ると、真青な海の上に軍艦だの商船だのが一ぱいならんでいて、煙突から煙の出ているのや、檣から檣へ万国旗をかけたわたしたのやがあつて、眼がいたいように綺麗でした。僕はよく岸に立つてその景色を見渡して、家に帰ると、覚えていただけに出来るだけ美しく絵に描いて見ようとした。けれどもあの透きとおるような海の藍色と、白い帆前船などの水際近くに塗つてある洋紅色とは、僕の持つている絵具ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても描いても本当の景色で見ると、描けませんでした。

ふと僕は学校の友達の持つている西洋絵具を思い出しました。その友達は矢張西洋人で、しかも僕より二つ位齡が上でしたから、身長は見上げるように大きい子でした。ジムとい

うその子の持つている絵具は舶来の上等のもので、軽い木の箱の中に、十二種いっしゅうの絵具が小さな墨のように四角な形にかためられて、二列にならなっていました。どの色も美しかったが、とりわけて藍と洋紅とは喫びつくり驚するほど美しいものでした。ジムは僕より身長せいが高いくせに、絵はずつと下手へたでした。それでもその絵具をぬると、下手な絵さえがなんだか見ちがえるように美しく見えるのです。僕はいつでもそれを羨うらやましいと思っていました。あんな絵具さえあれば僕だつて海の景色を本当に海に見えるように描かいて見せるのになあと、自分の悪い絵具を恨みながら考えました。そうしたら、その日からジムの絵具がほしくてほしくつてたまらなくなりました。けれども僕はなんだか臆おくびよう病びょうになつてパパにもママにも買つて下さいと願う気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思いつづけるばかりで幾日か日がたちました。

今ではいつの頃ころだつたか覚えてはいませんが秋だつたのでしよう。葡萄ぶどうの実が熟していたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように空の奥の奥まで見すかされそうに霽はれわたつた日でした。僕達は先生と一緒に弁当をたべましたが、その楽しみな弁当の最中なかでも僕の心はなんだか落着かないで、その日の空とはうらはらに暗かつたのです。僕は自分一人で考えこんでいました。誰たれかが気がついて見たら、顔も屹きつと度青かつたかも知れま

せん。僕はジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなってしまうのです。胸が痛むほどほしくなってしまったのです。ジムは僕の胸の中で考えていることを知っているにちがいないと思つて、そつとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、面白そうに笑つたりして、わきに坐つて^{すわ}いる生徒と話を^{はなし}しているのです。でもその笑つているのが僕のことを知つていて笑つているようにも思えるし、何か話をして^{はなし}いるのが、「いまに見ろ、あの日本人が僕の絵具を取るにちがいないから。」といつて^{はなし}いるようにも思えるのです。僕はいやな気持ちになりました。けれどもジムが僕を疑つて^{はなし}いるように見えれば見えるほど、僕はその絵具がほしくてならなくなるのです。

二

僕はかわいい顔はしていたかも知れないが^{からだ}体も心も弱い子でした。その上臆病^{おくびょうもの}者で、言いたいことも言わずにすますような質^{たち}でした。だからあんまり人からは、かわいがられなかつたし、友達もない方でした。昼御飯^{ほか}がすむと他の子供達は活潑^{かつぱつ}に運動場^{うんどうば}に出て走りまわつて遊びはじめましたが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけ

教場きやうじやうに這入はいっていました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなつて僕の心の中のよ
うでした。自分の席すわに坐つていながら僕の眼は時々ジムの卓テイブルの方に走りましました。ナイフで
色々ないたずら書きが彫りつけてあつて、手垢てあかで真黒まつくろになつてゐるあの蓋ふたを揚あげると、
その中に本や雑記帳や石板せきばんと一緒になつて、飴あめのような木の色の絵具箱があるんだ。そ
してその箱の中には小さい墨のような形をした藍や洋紅の絵具が……僕は顔が赤くなつた
ような気がして、思わずそつぽを向いてしまふのです。けれどもすぐ又横眼またでジムの卓テイブル
方を見ないではいられませんでした。胸のところがどきどきとして苦しい程ほどでした。じつ
と坐つていながら夢で鬼にでも追いかけられた時のように気ばかりせかせかしていました。
教場に這入はいる鐘かねがかんかんと鳴りました。僕は思わずぎよつとして立上りました。生徒
達が大きな声で笑つたり呶鳴どなつたりしながら、洗面所の方に手を洗いに出かけて行くのが
窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いながら、ふ
らふらとジムの卓テイブルの所に行つて、半分夢のようにその蓋を揚あげて見ました。そこには僕
が考えていたとおり雑記帳や鉛筆箱とまじつて見覚えのある絵具箱がしまつてありました。
なんのためだか知らないが僕はあつちこちを見廻みまわしてから、誰も見ていないなと思うと、
手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との二色ふたいろを取上げるが早いかポケットの中に押込

みました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に走って行きました。

僕達は若い女の先生に連れられて教場に這入り銘々の席に坐りました。僕はジムがどんな顔をしているか見たくつてたまらなかつたけれども、どうしてもそつちの方をふり向くことができませんでした。でも僕のしたことを誰も気のついた様子がないので、気味が悪いような、安心したような心持ちでいました。僕の大好きな若い女の先生の仰ることなんかは耳に這入りは這入つてもなんのことだかちつともわかりませんでした。先生も時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

僕は然し先生の眼を見るのがその日に限つてなんだかいやでした。そんな風で一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思ひながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴つたので僕はほつと安心して溜息をつきました。けれども先生が行つてしまうと、僕は僕の級で一番大きな、そしてよく出来る生徒に「ちよつとこつちにお出で」と肱の所を掴まれていました。僕の胸は宿題をなまけたのに先生に名を指された時のように、思わずどきんと震えはじめました。けれども僕は出来るだけ知らない振りをしていなければならぬと思つて、わざと平気な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場の

隅すみに連れて行かれました。

「君はジムの絵具を持ってきているだろう。ここに出し給たまえ。」

そういつてその生徒は僕の前に大きく拡ひろげた手をつき出しました。そういわれると僕はかえつて心が落着いて、

「そんなもの、僕持つてやしない。」と、ついでたらめをいつてしまいました。そうすると三四人の友達と一緒に僕の側そばに来ていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つも失なくなつてはいなかつたんだよ。そして昼休みが済んだら二つ失くなつていたんだよ。そして休みの時間に教場にいたのは君だけじゃないか。」と少し言葉を震ふるわしながら言いかえました。

僕はもう駄目だめだと思うと急に頭の中に血が流れこんで来て顔が真赤まっかになつたようでした。すると誰だつたかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢たせいに無勢ぶせいで逆も叶かないません。僕のポケットの中からは、見る見るマール球だま（今のビー球だまのことです）や鉛のメ
ンコなどと一緒に二つの絵具のかたまりが掴み出されてしまいました。「それ見ろ」とい
わんばかりの顔をして子供達は憎らしそうに僕の顔を睨にらみつけました。僕の体からだはひとりで

にぶるぶる震えて、眼の前が真暗まつくらになるようでした。いいお天気なのに、みんな休時間を面白そうに遊び廻っているのに、僕だけは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなぜしてしまつたんだろう。取りかえしのつかないことになつてしまつた。もう僕は駄目だ。そんなに思うと弱虫だつた僕は淋さびしく悲しくなつて来て、しくしくと泣き出してしまいました。

「泣いておどかしたつて駄目だよ。」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような憎みきつたような声で言つて、動くまいとする僕をみんなで寄つてたかつて二階に引張つて行こうとしました。僕は出来るだけ行くまいとしたけれどもとうとう力まかせに引きずられて階は子段しごだんを登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受持ちの先生の部屋へやがあるのです。やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは這入はいつてもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「お這入はいり」という先生の声が聞えました。僕はその部屋に這入る時ほどこいやだと思つたことはまたとありません。

何か書きものをしていた先生はどやどやと這入つて来た僕達を見ると、少し驚いたようでした。が、女の癖に男のように頸くびの所でぶつりと切つた髪の毛を右の手で撫なであげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、「一寸首ちよつとをかしげただけで何の御用

という風をしなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取ったことを委しく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔付きをして真面目にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか。」と聞かれました。本当なんだけれども、僕がそんないやな奴だということをどうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったです。だから僕は答える代りに本当に泣き出してしまいました。

先生は暫く僕を見つめていましたが、やがて生徒達に向って静かに「もういつてもようございます。」といって、みんなをかえしてしまわれました。生徒達は少し物足らなそうにどやどやと下に降りていつてしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに自分の手の爪を見つけていましたが、やがて静かに立って来て、僕の肩の所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返しましたか。」と小さな声で仰いました。僕は返したことをすっかり先生に知ってもらいたいので深々と頷いて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだと思ったと思いますか。」

もう一度そう先生が静かに仰った時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震

えてしかたがない唇を、噛みしめても噛みしめても泣声が出て、眼からは涙がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになってしまいました。

「あなたはもう泣くんじやない。よく解つたらそれでいいから泣くのをやめましょう、ね。次ぎの時間には教場に出ないでもよろしいから、私のこのお部屋に入らっしゃい。静かにしてここに入らっしゃい。私が教場から帰るまでここに入らっしゃいよ。いい。」と仰りながら僕を長椅子に坐らせて、その時また勉強の鐘がなったので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高く這い上った葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎつて、しくしくと泣きつづけていた僕の膝の上にそれをおいて静かに部屋を出て行きなさいました。

三

一時がやがやとやかましかった生徒達はみんな教場に這入って、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋しくつて淋しくつてしようがない程悲しくなりまし

た。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと僕は本当に悪いことをしてしまったと思ひました。葡萄などは逆も喰べる気になれないでいつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさしました。僕は先生の部屋でいつの間にか泣寝入りをしていたと見えます。少し痩せて身長の高い先生は笑顔を見せて僕を見おろしていられました。僕は眠ったために気分がよくなって今まであったことは忘れてしまつて、少し恥しそうに笑いかえしながら、慌てて膝の上から送り落ちそうになつていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して笑ひも何も引込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしないでよろしい。もうみんなは帰つてしまいましたから、あなたはお帰りなさい。そして明日はどんなことがあつても学校に來なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ。屹度ですよ。」

そういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながらつまらなく家に帰りました。そして葡萄をおいしく喰べてしまいました。

けれども次の日が來ると僕は中々学校に行く気にはなれませんでした。お腹が痛くなればよいと思つたり、頭痛がすればよいと思つたりしたけれども、その日に限つて虫歯一本

痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門を這入ることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんといつても見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生は屹度悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただその一事ひとことがあるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

そうしたらどうでしょう、先まず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そして昨日きのうのことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいてどぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳うそがわかりませんでした。学校に行つたらみんなが遠くの方から僕を見て「見ろ泥棒の謙うそつきの日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思つていたのにこんな風にされると気味が悪い程ほどでした。二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に、戸を開けて下さいました。二人は部屋の中に這入りました。

「ジム、あなたはいい子、よく私わたくしの言つたことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまつて貰もらわなくなつてもいいと言つています。二人は今からいいお友達になれば

それでいいんです。二人とも上手に握手をなさい。」と先生はにこにこしながら僕達を向い合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはいそいそとぶら下げている僕の手を引張り出して堅く握ってくれました。僕はもうなんといつてこの嬉しさを表せばいいのかわらないで、唯恥しく笑う外ありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真赤にして「ええ」と白状するより仕方ありませんでした。

「そんなら又あげましょうね。」

そういつて、先生は真白なりンネルの着物につつまれた体を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取つて、真白い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色の鉢で真中からふつりと二つに切つて、ジムと僕とに下さいました。真白い手の平に紫色の葡萄の粒が重つて乗つていたその美しさを僕は今でもはつきりと思い出すことができます。

僕はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなつたようです。

それにしても僕の大好きなあの子のいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは見え

ないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

青空文庫情報

底本：「赤い鳥傑作集」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年6月25日発行

1974（昭和49）年9月10日29刷改版

1984（昭和59）年10月10日44刷

初出：「赤い鳥 第五巻第二号」

1920（大正9）年8月

※表題は底本では、「一房《ひとふち》の葡萄《ぶどう》」となっています。

入力：鈴木厚司

1999年2月13日公開

2018年10月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一房の葡萄

有島武郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>